

# サッカーにおけるボールを持たないときの動きの

## 感覚意識に関する研究

小松 知樹（上越教育大学大学院）

### 1. 目的

本研究の目的は、学校体育のサッカーにおける、ボールを受けるための動きについて、学習者の習熟度に応じて指導できるよう、意識すべきポイントと指導の観点を示すことである。なお、本研究における動きの感覚意識とは、攻撃時にアタッキングサードでボールを持っていないプレイヤーが、ボールを受けるために意識していることとする。

### 2. 研究の手順

本研究は、次の手順で進められた。

- ①調査対象とするボールを持たないときの動きの設定（小・中・高校の学習指導要領解説および先行研究の検討）
- ②予備調査（N 大学サッカー部）
  - a) 熟練者のゲーム撮影
  - b) 熟練者の選定（5名）
  - c) 設定した動きの発生状況の確認
- ③本調査（N 大学サッカー部）
  - a) 選定した熟練者のゲーム撮影
  - b) 内観記録用紙（周東 1998）による調査
  - c) インタビュー調査
- ④各熟練者の動きの結果と考察
- ⑤本調査のまとめ
- ⑥学校体育のサッカーにおけるボールを持たないときの動きの意識すべきポイントと指導の観定の提示

### 3. 調査対象とするボールを持たないときの動き

本研究が調査対象とする動きは、表 1 に示す 4 つとした。これらは、学習指導要領解説の例示に記載されている動きを、本研究においてサッカー用に修正したものである。また、設定した動きのゲーム中における発生状況は、表中 i) と ii) の小学校と中学校 1・2 年で目標とする動きについては、11 回以上と多く確認されたのに対し、iii) と iv) の中学校 3 年・高校 1 年と高校 2・3 年で目標とする動きについては、5 回以下と多くは確認されず、難易度の高い動きであるということが言える。

表 1 対象とするボールを受けるための動き

ボールを受けるための動き	対象学年	発生回数
i) 敵陣のペナルティエリア周辺への移動とパスを受けてからのシュート、またはパス	小学校 5・6年	11回
ii) パスを受けるために、アタッキングサードの空いているスペースに動くこと	中学校 1・2年	24回
iii) アタッキングサードにおいてパスを出した後、に次のパスを受ける動きをすること	中学校3年 高校1年	5回
iv) シュートをしたり、パスを受けたりするために味方が作り出したスペースに移動すること	高校 2・3年	1回

### 4. 結果と考察

4 つの動きに共通して、ほとんどの熟練者が意識していたことは、「相手 DF の位置」、「空いているスペース」または「味方が作り出したスペース」、「相手 DF との距離感」であった。「相手 DF の位置」を意識することで、アタッキングサードにおいてどこにスペースがあるのかを把握することが可能となる。次に、「空いているスペース」または「味方が作り出したスペース」を意識すると、どこの空いているスペースへ動けばより効果的なのかを把握することができる。さらに「相手 DF との距離感」を意識すると、相手 DF にボールを奪われるリスクが軽減されたり、余裕を持って次のプレーに移ることができたりする。最後に、ボールを受けるということは、パスを出す味方が存在する。いかなる場合においても、「味方のボール保持者の状態」を把握し、パスを出せる状況にあるのかを判断することが大切である。

### 5. まとめ

本研究で明らかにされた 4 つの感覚意識は、本研究で設定した 4 つの動きに共通するものであるため、ボールを受けるための動きにおいて、動く際に意識すべき大切なポイントであると同時に、動きの指導を行う上で重要な観点であると言える。

### 6. 主な参考文献

- 1) 文部科学省, 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 保健体育編 体育編, 東山書房, 2018
- 2) 金子明友, わぎの伝承, 明和出版, 2002